考古学的眼差し

-読み替えによる継承の場の提案-

■重要伝統的建造物群保存地区の問題、未来を考える

日本には現在、43 道府県 101 市町村 123 地区もの重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）があり、規模や種別は違ど、どれも我が国にとって歴史的価値の高いものとなっている。それぞれの地域に保存しなければいけない建築物や工作物、環境物件があり、各自治体がガイドラインに沿って景観を保全しなければならない。特に観光地化されていない地域は、インフラ整備などの都市発展から取り残されたがために結果として歴史的景観が保たれた、というケースが多く、過疎地域と同じように後継者不足や世帯数・人口の減少、空き家対策、転出者の増加が進行しているのが現状である。そのため、こうした地域では遺された景観を守りながら、その町の環境を魅力的に活用していく、持続可能な社会づくりが重要になってくる。そのような中での建築のあり方も見直す必要がある。

■目的　持続可能な町らしさの再構築

街並みとは更新されていくものであり、既存のガイドラインでは修理や修景に重きを置く、過去のみに囚われたガイドラインとなっている。町には伝統的建造物以外にも認定はされていない建物も多く、それらも街並みを構成してきた大事な要素の一部であり、そうした建物も含めて町は醸成してきた。本設計では、町で行われていた文化や生活、空間に基づいて、街並みの要素を等価に扱うことで持続可能な新しい町らしさを取得するための提案である。

■敷地　茨城県桜川市真壁町

茨城県桜川市にある真壁町は筑波山の北側に位置し、人口が約 19,000 人の町である。真壁城（国指定史跡）に付属した集落に起源を持ち、周辺地域の物産が集散する在郷町として発展し、北関東及び東北地方への木綿販売の拠点としても繁栄してきた。現在でも近世初頭の街並みや町割りをほとんど残しており、町並みは茅葺家屋が主体だったが、火災などもあり蔵造の町屋が普及していった。2011 年には公募型プロポーザルによって、真壁伝承館（設計組織 ADH）を建設し、地域の歴史・文化・伝統を伝え続けるための中心施設として位置付けられている。しかし、最寄駅まで車で約 20 分、バスは数年前から運行が始まる等、アクセスが悪く、真壁町は陸の孤島と化している。

周辺広域図

■街並みとハレ

真壁祇園祭や真壁のひなまつり等のハレの場は賑やかであり、町を巻き込んだハレの場を形成している。祇園祭の引き廻しでは、町内会が保有している山車が真壁の町を練り歩き、ひなまつりでは軒先に雛人形を展示し町に訪れた人をもてなすなど、この町のハレの場は街並みと特に関係性が強い。

真壁祇園祭

真壁のひなまつり

■遺構への着目

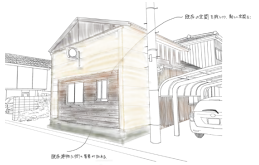
真壁町には東日本大震災などを契機にした遺構が多数あり、町の中に溶け込んだ状態で散見される。これらは金銭的に厳しいことや持ち主が高齢化、死去していることなどを理由に、そのままで放置されている。しかしこれらは町を彩ってきた大事な要素であり、再び役割を与えることは出来ないだろうか。

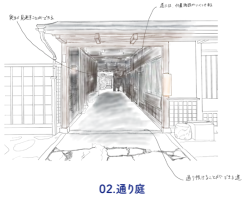
■真壁町民の思いを継承する

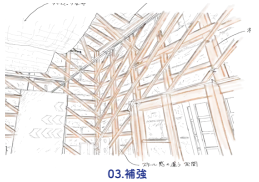
町民の方々にこの町での思い出についてヒアリングを行った。ヒアリングの結果、昔、町には子どもの遊び場などの居場所がたくさんあり、産業を中心に町が賑わっていたことが分かった。これらを基に、真壁町民の町の軌跡を再構築していく。

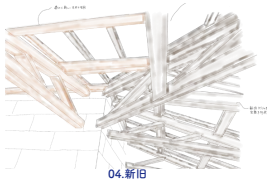
- 元は清水家→スーパー→現在駐車場
- 昔は飲み屋が数軒あった
- 昔は呉服店だった。現在は弁当屋になっている
- 昔は車通りが少なく、道路がボール遊びの場所だった
- 密弘寺で子どもたちは遊んでいた
- 祇園祭で神輿が前の道を通り、その時の人だかりはすごい
- 昔は、役場（今：真壁伝承館）まで続く細道があった
- 子供の頃、出店があった
- 伝承館では、勉強しに来たりする
- 昔は裁縫女学校があり、和裁や洋裁を習えた
- 樺穂小学校旧校舎を移築している
- 昔は公園があり、遊具で子どもたちが遊んでいた
- 10 年前まで小さい公園があり、地域の遊び場になっていた
- 鉄道が走っていた頃は、たくさんの人が真壁町を訪れた
- 桜の木は有名でその時期に利用者は増える

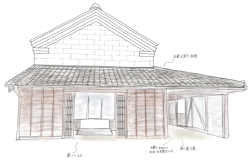
■真壁町を構成してきた要素

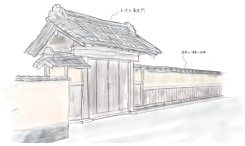

01.挿入


02.通り庭

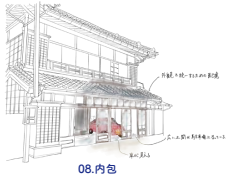

03.補強

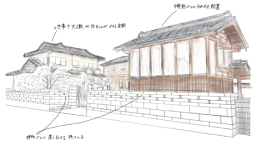

04.新旧

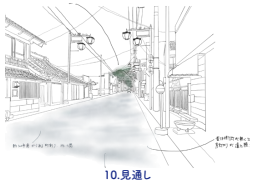

05.バッファー

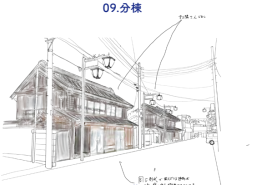

06.境界

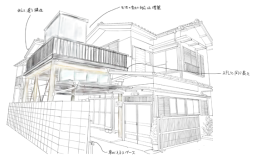
07.滞在

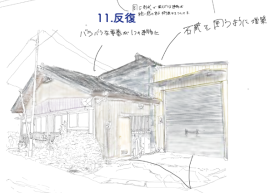

08.内包


09.分棟

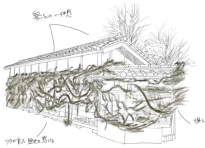

10.見通し

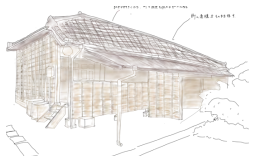

11.反復


12.増築


13.混構造

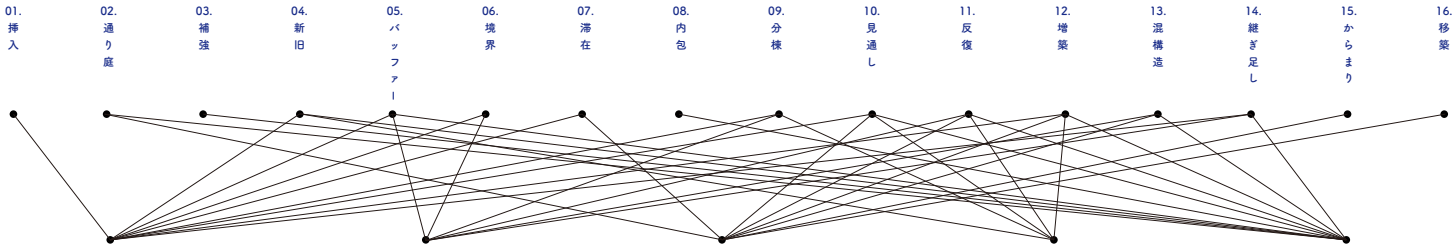
14.継ぎ足し


15.からまり


16.移築

■設計

真壁町にある様々な遺構と町民の記憶のイメージから、敷地の選定、プログラムの計画を行い、本設計を今後の計画に活用できるよう、敷地を 5 つ選定する。これらの敷地は、主要な道沿いに計画し、祇園祭やひなまつりなどのハレの日を通して、相互に連関していく。各要素は、敷地、プログラム、遺構などから適宜選択していく。遺構を真壁町の要素を使い再構築することで、新しい風景や生活が生まれる、そんな建ち方を目指した。



site1. 『交流を促す移住者用住宅』
既存用途：蔵、車庫
用途：住宅、ゲストハウス

site2. 『新しい人流の拠点』
既存用途：ホーム
用途：カフェ、サイクリングショップ

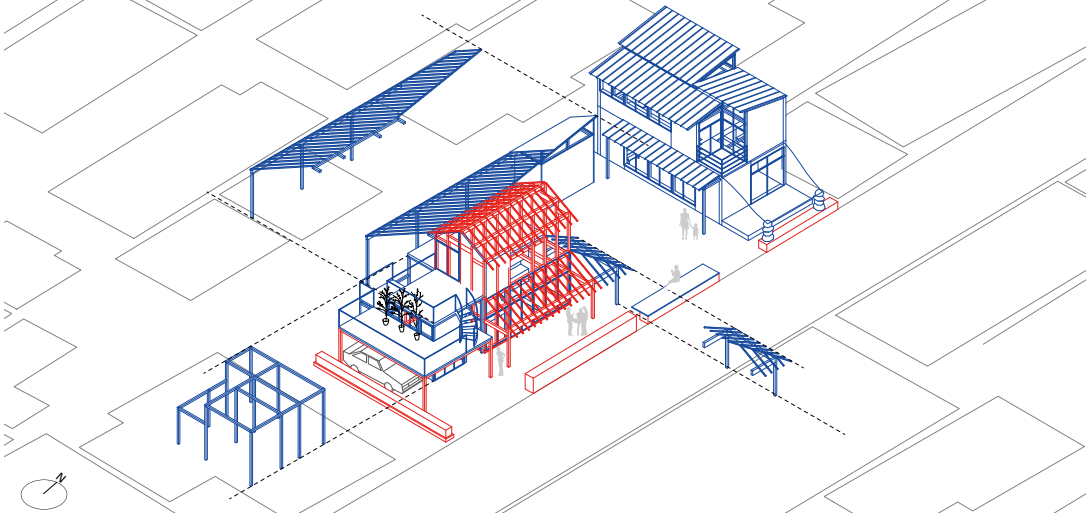
site3. 『町民で使うみんなのキッチン』
既存用途：住宅（損壊有り）
用途：キッチン、集会所

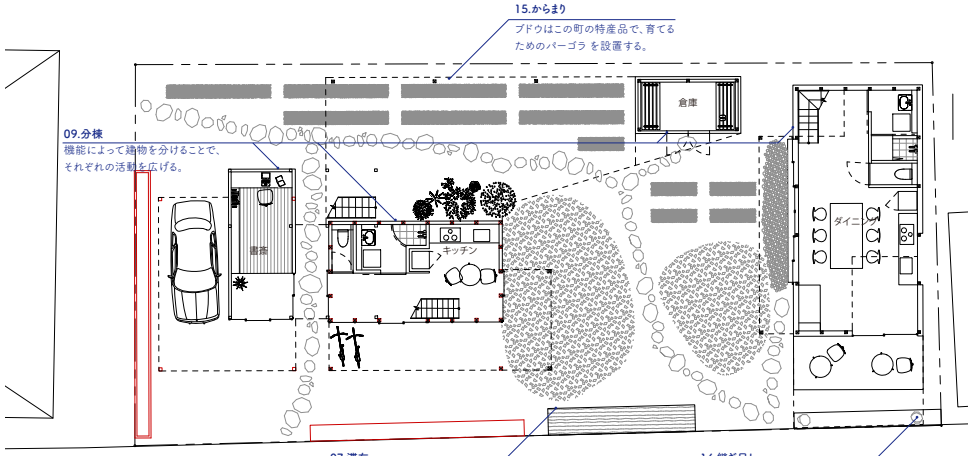
site4. 『遺構に触れながら遊ぶ場』
既存用途：蔵（損壊有り）
用途：遊び場

site5. 『展示室のような山車倉庫』
既存用途：山車倉庫
用途：倉庫、展望台

■site1.『交流を促す移住者用住宅』

移住者住宅は、2、3 年の利用を行う、町に新しく移り住んでいくための仮住まいとして町が提供する。移住者は併設するゲストハウスを運営しながら、この町で生活していく。蔵という閉鎖的な建物を増築し、外に開いていくことで周辺住人と交流するきっかけを持ち、町での生活に馴染んでいく。

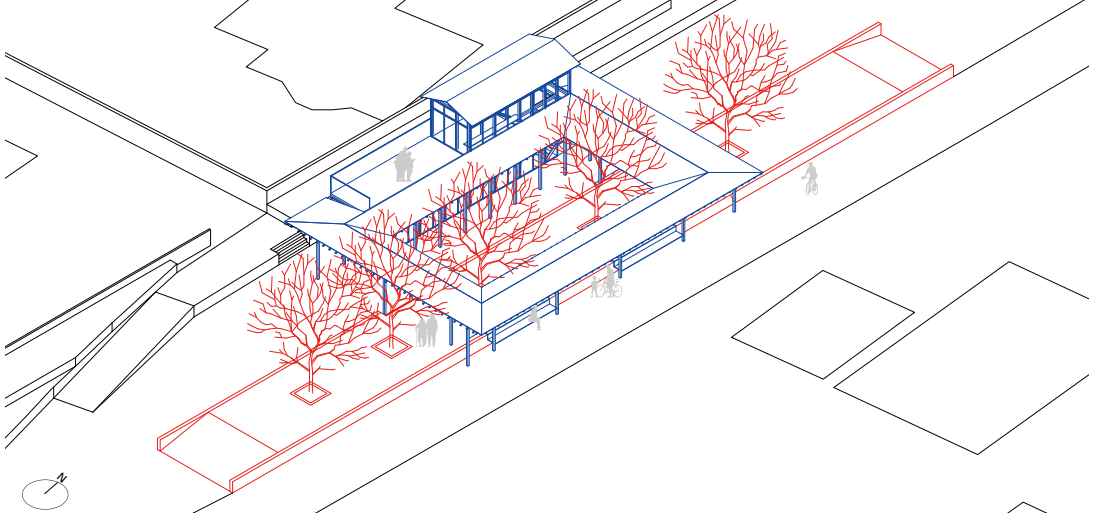


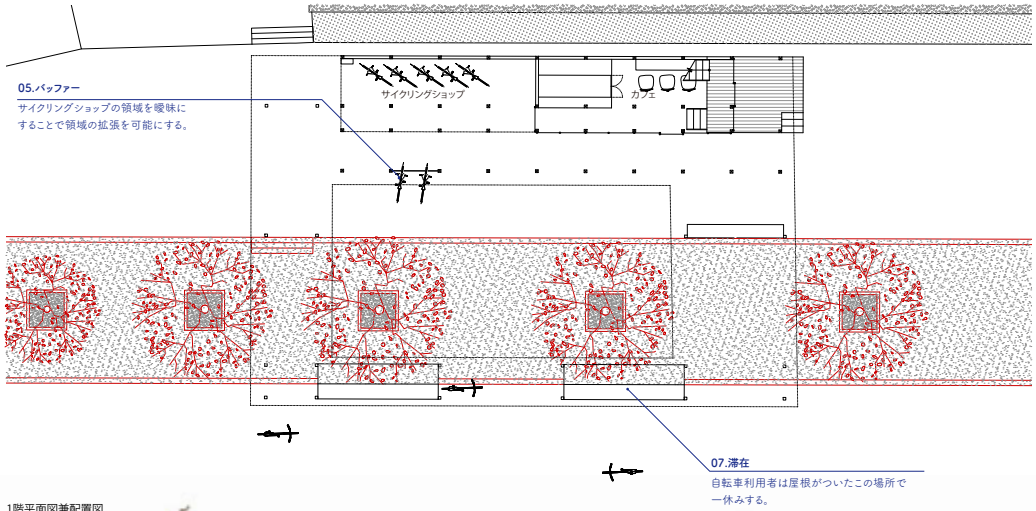


1階平面図兼配置図

■site2.『新しい人流の拠点』

筑波鉄道が廃線になり、現在は土浦市 - 桜川市まで通じるサイクリングロードに変わったが、ホームは未だ残されたままである。
遺されたホームと桜を内包した真壁町へ訪れるきっかけとなる施設へ再構築していく。

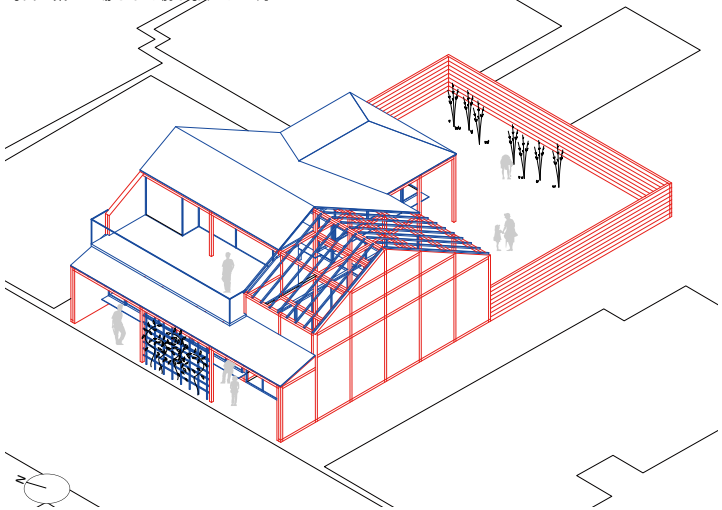


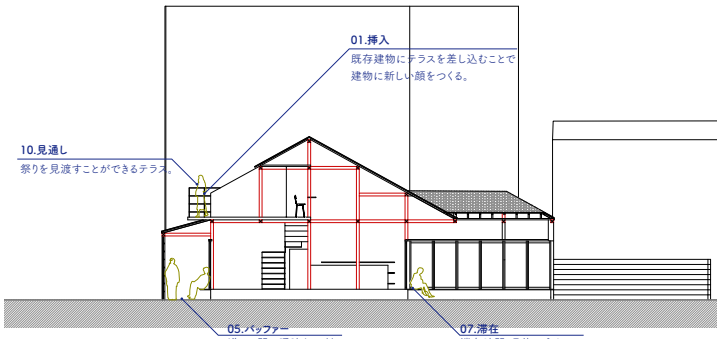


1階平面図兼配置図

■site3.『町民で使うみんなのキッチン』

現在は空き家として使われていない本施設は、町の中心に位置し、以前は周辺に飲食店が多数存在し、賑わっていた。閉鎖的だった建ち方に、人の流れを入れ込むための風通しの良さを持った要素を組み込み、町民の集いの場として親しまれていく。

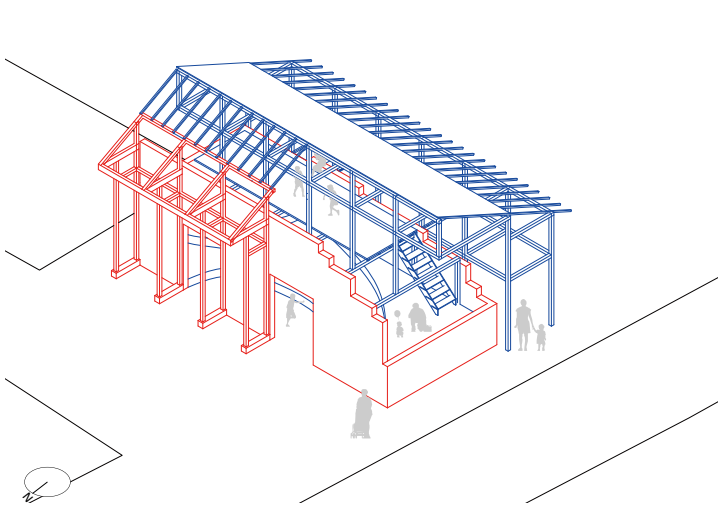


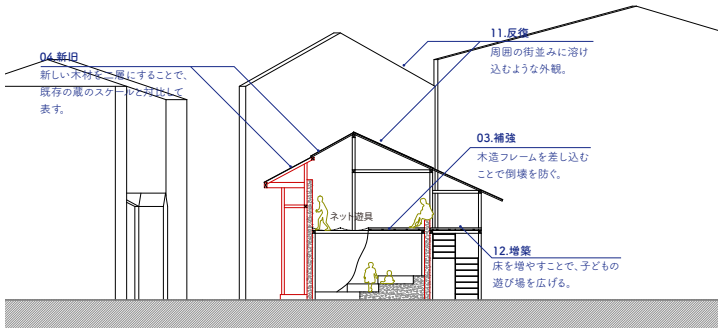


断面図

■site4.『遺構に触れながら遊ぶ場』

この石蔵は東日本大震災で損壊した工務店の倉庫である。昔この周辺では、空間を見つけては遊び場として活用していた。既存の囲われた空間を増築、外へと拡張していくことで新しい子どもの居場所となる。

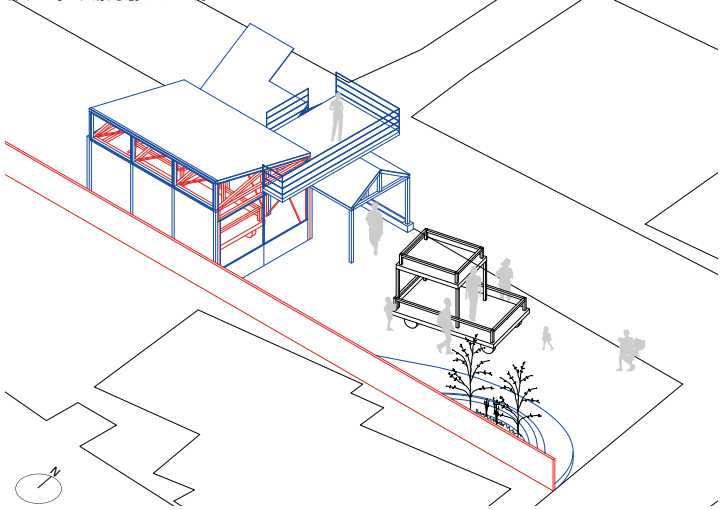


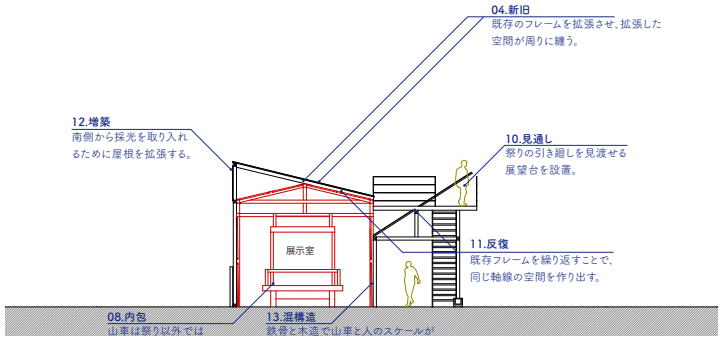


断面図

■site5.『展示室のような山車倉庫』

真壁町では祇園祭で山車で町内を回る、引き廻しがある。その山車を保管しておく倉庫はトタンで覆われた閉鎖的な建物であった。祭りの動線に連関するように移築、倉庫を展示室として開放していくことで新しい町の風景を創っていく。





断面図